

巻頭随筆——一冊の本

米中日、三角形時代の幕開け
橋爪大三郎 *Hishizume Daichirou*



一冊の本 2

この十年間、日本経済は停滞に苦しんできた。いまでもその苦しみはただ中にある。それを尻目に、アメリカは好調に転じ、中国もひき続き活力ある高度成長を続けている。東アジアの、そして世界の二十世紀は、ひと昔前の想像とはかなり違った図柄をあらわしつつある。

いま日本に生きている日本人は、「戦後」に慣れている。特に中年以下の人びとは、豊かな経済大国である日本しか知らない。アジアの国々より、日本が進んでいるのは当たり前。そんな前提が頭にこびりついている。

けれども、もともと日本は、ひ弱な小国だった。日清戦争もいちかばちかだったし、日露戦争は勝った日本のほうがびびりした。対米戦争も、せめて引分け。本気で勝つと誰も思っていなかった。案の定、アメリカは強くてこてんぱんに負けてしまい、そのアメリカに占領される。その庇護のもと、経済に邁進したのがこの半世紀あまりである。

二十一世紀の国際社会は、米中を主軸として動くことになろう。日本は、わき役に甘んじるしかない。この新しい世界に、日本人は早く慣れる必要がある。

これを阻止したのが、アメリカである。なぜアメリカは、日本が中国を侵略することが許せなかったのだろうか。

まず、流動的な朝鮮半島の情勢を考慮しなければならぬ。北朝鮮は最近、配給を廃止し価格を自由化するなど、あと戻りのきかない経済改革に踏み切った。アメリカがアフガニスタンに続いてイラクを攻撃し政権を転覆させるなら、次は北朝鮮の番である。そこで、外圧を理由にもっと大胆な改革を進める動機が生まれたのである。いずれにせよ、朝鮮半島が統一に向かうのは必至の状況だ。

これから、東アジアを焦点として、国際情勢はどのように動いていくのか。

統一コリアは、日本と中国のあいだで、中国寄りの姿勢を強める可能性が高い。

義への転換や、連邦制、複数政党制への移行を含む政治変革を迫られる。その過程で、多少の混乱が起こるかもしれない。

も緊密になる中国との、安定した友好関係にますます大きな利益を見出す。つまり、米中の両大国に挟まれ、両国が衝突しても、頭越しに握手されても、困惑するのが日本なのである。

*橋爪大三郎・島田裕巳著「日本人は宗教と戦争をどう考えるか」は朝日新聞社より発売中。